

# TASSAJARA ZEN

## MOUNTAIN CENTER 冬安居

沖田玉映

サンフランシスコから南へ百マイル下ったカーメル市からもう一、四十マイル東の山奥にタサハラがある。そこには TASSAJARA (タサハラ) ZEN MOUNTAIN CENTER が所在している。(以下 タサハラと略す。) タサハラは古くから、温泉の避暑地として知られている。

一千年前に、ローカルのインディアンが最初に温泉を発見し、一八四三年頃に狩人のハンターによつて世間に知られるようになる。幾山を越えて行く故、昔は幌馬車に昔物を乗せてタサ

ハラへ避暑に赴く写真が残されている。現在も補修し使用している石造部屋は、百十年前に建てられている。

昭和四十六年に遷化された鈴木俊隆老師（曹洞宗）が米国に渡り、特にサンフランシスコを中心には布教され、サンフランシスコ禪センターを設立される。現在は鈴木老師の孫弟子にあたる天真アンダーソン師によつて受け継がれている。サンフランシスコ禪センターは市内と市内から十五マイル離れた所に、GREEN GULCH

FARM とそしてタサハラの二ヶ所、その他、米国内の各所に於いてグループ活動をしている。

こここのタサハラに最初に訪れたのは、カルフアルニアの曹洞宗合同攝心会が昨年五月にタサハラに於いて行なわれた時、その折、七十歳過ぎた禪僧（女性）にお逢いし、その高齢にもかかわらず、堂々かくしやくたる導師される姿に感銘を受けて、今度は是非、ご一緒に安居（修行）をしたいと思い、さつそく前角老師に意考を相談したところ、他の所を見ることも勉強になるだろうとおっしゃり喜んで、手続をとつてくださる。

すでにご承知のように米国には檀家制度はない。経済基盤確立の為、逸早くサンフランシスコ禪センターは、タサハラに禪道場を作り、春から初秋にはリゾートホテル形式にして一般者を受け入れて、経済基盤をはかつている。タサハラクッキングと固有名詞の如く呼ばれ、タサ

ハラは米国で最初に豆腐料理を拵め、今は温泉と豆腐料理の人気を高め、いつも予約が一杯とのこと。オフシーズンの秋と冬に年二回、九旬（九十日）安居（坐禪修行）を行なう。その時は、修行者以外の立入を禁止している。小尼は一番嚴寒の一月九日からの冬安居に、参加するご縁に恵まれる。

車でタサハラに着くと、まずダルマ（仏の教え）ゲートと呼ぶ日本風の屋根の付いた門が最初に目につく。タサハラの大きな建物を紹介すると、一番大きな木造建築の僧堂は、ほぼ日本の僧堂形式になつていて。僧堂の横に流れる川を隔てた所に小篋に囲まれた茶室建築の開山堂、石造りのどつしりとした典座寮（台所）、そして二階建てのダイニングルーム、一階はミーティングやゲスト用の食堂、二階は八ヶの客室になつていて。少し離れた所の小川の辺に、少し入母屋造りに似た和風建築の天然温泉の浴室

とサウナ。その回りに、コティジ風のキャビン（客屋）が約四十近く点在する。小尼はダイニングルームの二階の一番奥の、川の流れる音の聞こえる、ベットと小さな整理タンス、ランプ二個を設置してある三畳ぐらいの広さの、質素ながら落ち着いた部屋を貸して頂く。

今回の参加者は、米国以外からはメキシコ、ベネゼエラ、イギリス、ドイツ、フランス、ポーランド、ボルゲリア、中国と世代も、二十代から七十代と幅広く、全員約六十人程（その中、出家者は十人程）。

本格的、修行期間に入る前に旦過寮（修行の準備期間）を行なう。前回、安宿した者は一日、それ以外の者は、全員、経行（休憩）なしの朝から夜まで五日間、坐禅をこなさなければ、この安居に参加出来ない規則になつていて。坐わり馴れない一般の参加者は、大変な五日間であつたろうと察する。全員、無事旦過寮を終えた

時には、お互に同じ難関を通つて来たという気持ちが通じ合つてか、自然と一つの和合となり、これから約九十日間の修行生活が始まる。

一日のスケジュールは朝、振鈴（起床）四時、暁天坐禪二炷、四時二十分から、そして朝課、粥座、スタディー、小休憩、清掃、閑中坐禪またはレクチャード（提唱、話し合い）、斎座（昼食）、休憩、一時より作務、開浴（入浴）、晩課（勤行）次いで、薬石（夕食）、小休憩、スタディー、夜坐（坐禪）二炷、開枕（就寝）九時と大体、以上内容により行なう。

タサハラは山の山奥の為、自家発電により電気の使用は最小限にしている。晨朝、振鈴の音に眼をさめし、眠り足りない体をおこして、僧堂へ急げば外はまだ満天の星空、外気の澄んでいるせいか、よけいに肌に冷めたく感じる。参道のランプの点々とした明りが揺れ動き、その中、僧堂集合の合図の木板の音がゆっくりと響

き渡る。ランプの温かい炎に「仏が速く、僧堂へ赴けよ」とおっしゃっている如く仏の慈愛を思われる。数日ならばランプ生活もロマンチックになるけれど、日常茶飯事となると大変である。晨朝、皆なが僧堂に集まる前に、僧堂と参道のランプ内外約六十個のランプに明りをともす当番を何回か勤める。丁度当番の時、めったに雨の降らないタサハラなのに、どしやぶりの多雨の中、外は暗く懷中電燈を手に持ち、首にマッチの入った箱をぶらさげて、点け歩く。多雨の為マッチが点かず、ライターに替えて、すぐに炎が消えてしまい四苦八苦したことを、今となっては懐かしく思い出す。なに一つ取つても修行と感じる。スイッチを押せば、明るくなることを当たり前に馴れている小尼には好い経験をする。

食事は三度、僧堂行鉢（正式な作法）により大擂（鳴し物）を用いて行なう。皆な器用に作

法どうり、応量器や箸を扱っている。もちろん全て精進料理のベジタリーにより、朝はお粥の代用として十種類のオートミール、ごま塩が一緒に毎日、替りながら出てくる。斎座（昼食）のおもしろいメニューの中に、豆腐シチュー、味噌と醤油の味付け風、何々美味しい、デリシャス！ 薬石（夕食）はグリーン野菜のおひたしと朝と昼の残り物をミックスした和風おじやといったところ、栄養のバランスもとれて、上品に味付けしている。

大凡、典座寮（台所）で温かい味噌汁を作つても、僧堂で頂く時には、どうしても、ぬるくなってしまう。しかしここのタサハラは僧堂で坐っている修行者達が応量器を開いてから、汁物は汁什（深鍋）に移す、そこまで心遣いに徹している。

斎座（昼食）を済ませ、休憩時間を一時間程すると、ガラン、ガランと山の谷間の静寂を破

つて響き渡り、田舎の教会の鐘の音に、似ている。これは作務開始の合図の鐘の音、作務は午後一時から約三時間程、行なう。いつも感心することは、彼らは家や何んでも、自分達の手で作つてしまふことと、女性もたくましく、肉体労働も殆ど男性と同じように力強く一緒に働いている。小尼も皆なと一緒に作務を行ない、斧を振り上げるだけでも重いのに、それを用いて丸太割りの初めての経験をする。又、逆に男性も典座（台所）寮、裁縫の作務をしている。

一日のスケジュールの中にスタディという看護の時間（仏教関係の読書時間）がある。米国のどこの MONASTERY（禅道場）にスタディーの時間、話し合いや質疑応答の多いことが特徴に思う。ここに参加している人は高学歴の人が多く、又、熱心に仏教や東洋哲学を勉強している。我々の ZEN の修行は、文字を追うことよりも、むしろ実践し、この身で体得することを



重んじることも充分、彼らは知っている。しかしどうしても最初に頭の中で理解してからでないと行動に移せない。理路整然としないと納得出来ない。これは文化の違いからと思う。

今回の参加者の中に、二十代から五十代の人々が長期間の修行に参加している。一番働き盛りの人が仕事はどうするのかと思えば、こちらは終身雇用制度と違う。今、一番何をするべきか、しっかりと人生を考えたいと思うと、仕事を辞職して参加し、又、再就職する。又、六十歳過ぎて退職した人も真剣に仏道を求めて参加し、若い人と一緒に修行することは、さぞ大変であろうと察するけれど、けして自分を甘やかさず、配役も平等に勤め立派に果たしている。一つの集団生活の中で、特別に目上の人を持ちあげたり、若い人を青二歳的に扱かわざ、お互に尊重し、一対一のフレンドリ的な対等な付き合い方である。各自がしっかりと自分の意見を

持つて、堂々と意見を述べあう。小尼が時々戸惑うのは、個人主義の違いにびっくりさせられる。

ある時、洗面所に「BODHISATTVA SLEEPING」と書かれたカードを見つけ、「菩薩が寝ている」とは如何なる意味か、少々考えてしまい、あつそうか菩薩になる。つまり仏なる心が眠っている、もつと水やトイレットペーパー等を大切に使うようにとの注意、何々洒落たことを書いていると感心したけれど、後に、昼寝をしているから、静かにしてほしいと知る。一度、入口に立ち、話しかけていたら、ここのかードが見えないのか、静かにしてほしいと言う。修行中に昼寝をしている人の主張が通るから、おもしろい。

日本人の思っている個人主義とは、少々違うよう思う、何か個人主義というと自分勝手な、自己中心的な考え方を個人主義と見方をしている

ように思う。

例えばこちらの親切とは、何から今までの至れり尽くせりの親切の仕方よりも、自分から困ったことや、わからないことを質問したり、聞いたりすると、嫌な顔をせずに、応対してくれることを何度も繰返し聞いても、親切に教えてくださる。しかし、こちらが困ついても、自分から言うまでは、そのままとなつていて。そして自分で出来ることは、何でも人に頼らず、自分ですることが、前提となつていて。

国が違えば自ずと習慣の變つて来るのは、当たり前のこと、今回の安居に於いて、また一層色々な事を、特に個人主義について学ぶ機会を得る。タサハラの天眞先生始め、多くのメンバーの方々に本当に親切にして頂いたことは忘れられない。又、小尼は、何処へ行つても親切にして頂く、これも、偏に前角老師様や黒田老師様の

余徳のお陰と感謝している。

本当に日米、多くの方々による、ご支援、ご法愛を頂き、アメリカ禪を学ぶことが出来る幸に感謝している。

紙上を借りて、厚く心より御礼を申し上げます。

合掌